

市区町村名	徳島県阿南市	担当部署	産業部 野球のまち推進課
		電話番号	(0884) 22-1297

1 取組事例名

「野球のまち阿南」推進事業

2 取組期間

2007年（平成19年）～ 継続中

3 取組概要

地域で盛んな「野球」を通じて、産業・観光の活性化とスポーツ振興を図っています。

- ①集客特に宿泊客獲得に結び付く大会の開催
- ②合宿の誘致による宿泊客の獲得
- ③野球観光ツアーの開催による宿泊客の獲得
- ④集客に繋がるイベント開催（昨年は東京六大学オールスターゲーム）
- ⑤宿泊型野球教室の開催
- ⑥所蔵する野球関連グッズの展示事業（展示会の開催）

4 背景・目的

温暖な気候と自然に恵まれた阿南市はスポーツが盛んなまちです。中でも、野球は昔から人気が高く、少年から古希（70歳）まで、100を超える連盟登録をしたチームがあります。幅広い年齢層でこれだけ多くのチームがある地域は全国でも珍しいといわれています。

2007年、四国最大級の「JAアグリあなんスタジアム」の完成を機に、「野球のまち阿南構想」がスタート。2010年には産業部の中に「野球のまち推進課」を創設しました。「野球」の冠がついた課がつくられたのは、全国の自治体で初めてのことです。

本市は、地域経営戦略として、野球を通じて産業・観光の活性化とスポーツ振興を図る、いわゆる「スポーツツーリズム」を推進していくことを決め、野球によるまちおこしを実践するとともに、全国に向けてPR活動を展開しています。



JAアグリあなんスタジアムで行われている野球観光ツアーのようす

5 取組の具体的内容

① 集客・宿泊客の獲得に結びつく大会の開催（27年度の実績）

- ・西日本生涯還暦野球大会（毎年4月に開催し9回目。28チーム560人が参加）
- ・少年野球全国大会（毎年7月に開催し4回目。28チーム840人が参加）
- ・阿南市民の集い長時間野球大会
（毎年8月に開催。第3回大会は28チーム560人が参加。55イニング戦い紅組60点ー白組41点）
- ・西日本あかつき大会（毎年10月に開催。8チーム160人が参加）
- ・徳島県500歳野球大会（毎年10月に開催。13チーム260人が参加）
- ・都市対抗四国予選大会（4年に1回・6チーム・180人が参加）
- ・阿南市高校新人交流戦
（毎年7月～9月に開催。8チーム（県外の有名高校を招待）がレベルアップを図る）
- ・四国高校春季大会、四国高校秋季大会、JABA四国大会などを持ち回りで開催しています。

② 合宿の誘致による宿泊客の獲得

- ・大阪市立大学（近畿学生野球連盟）の定期合宿（毎年春・夏、年2回実施）
- ・北信越地区 選抜高校野球出場校の大会直前の強化合宿（敦賀気比高校など）
- ・社会人野球チームの合宿
- ・小学生チームの合宿

③ 野球観光ツアーの開催による宿泊客の獲得

- ・全国各地から年間7日、約20チームを受け入れている。
- ・野球場と宿舎の確保、対戦チーム、審判・放送員の手配、交流会（阿波踊り）の開催

④ 集客に繋がるイベントの開催

市民に夢と感動を共有するとともに、交流を深めることでリピーターの増加につなげています。

⑤ 野球関連グッズの展示

地元出身のプロ野球選手や阿南市とつながりのある有名選手のユニフォームやサイン入り色紙など、野球のまち推進協議会が所蔵する野球関連グッズの展示会を開催し、野球のまちをPRしています。

⑥ 放送記録員養成事業

平成22年度から放送記録員養成講習会を開催し、毎年約20人が受講。現在、約30人が第一線で活躍中。

⑦ 審判員養成事業

養成講習会を平成22年から開催し、毎年約30人が受講。現在35人が第一線で活躍中。

⑧ 野球関連商品（お土産品）の開発と販売促進

- ・野球まんじゅう「球（きゅう）」を開発・商品化し、市内5店舗の和洋菓子店で製造・販売。
- ・阿南活竹人形職人会が打者や投手の動きを忠実に再現した「野球活竹人形」を開発し、製造・販売。

⑨ 野球のまち阿南を応援する企業との協定

“スポーツマンシップに乾杯”を企業スローガンに社会貢献事業等に取り組むサッポロビール株式会社と「まちづくり協定」を締結し、まちづくり協力金の協賛を得て、野球のまち推進事業に役立っています。協賛金は、阿南市内で消費・販売された同社の瓶ビール、缶ビール1本、樽1リットルあたり1円として算出。平成27年度は32万円の協賛金をいただきました。

⑩ モンゴル野球交流事業

1991年（平成3年）、日本モンゴル文化交流協会がモンゴルを訪問した際、少年から受け取った1枚の手紙がきっかけでモンゴルとの交流が始まりました。

「野球がしたいけれど道具がない」。モンゴルの子どもたちに野球道具を送ろうと、徳島県軟式野球連盟と旧那賀川町体育協会が草の根活動を展開。以来、指導者講習会や野球交流など、野球でつながる交流が続いています。主な交流事業は以下のとおり。

- 1992年（平成4年） モンゴルのグラムイン・ヨンドン駐日全権大使に野球用具を贈呈
- 1993年（平成5年） モンゴルの野球少年20人が旧那賀川町でホームステイ
- 1994年（平成6年） 旧那賀川町の小中学生13人がモンゴルでホームステイ（ゲル体験）
- 1995年（平成7年） 全国から集めた寄付金1,300万円でウランバートルに野球場を建設。
- 2007年（平成19年） 合併後、岩浅市長ほか8人の訪問団がモンゴルを訪問。ウランバートル市長、在モンゴル日本大使と面会
- 2009年（平成21年） 全国から寄せられた野球道具431点をモンゴルへ寄贈。
- 2011年（平成23年） 映画会社アートグレイフィルム社（東京）から「モンゴル野球青春記」の映画撮影協力依頼
- 2012年（平成24年） 阿南市で「モンゴル野球青春記」の映画撮影が行われ、約2,000人のエキストラが協力
- 2013年（平成25年） 映画「モンゴル野球青春記」全国上映
岩浅市長ほか14人の訪問団がモンゴルを訪問。野球指導、映画の特別上映会、国会議事堂・日本大使館などを訪問
- 2014年（平成26年） 野球交流記念誌「阿南・モンゴル草の根の国際交流～一人のモンゴル少年の手紙から始まった壮大なドラマ～」を発刊
- 2015年（平成27年） 那賀川町の少年野球チームがモンゴルを訪問し交流試合を行う
- 2016年（平成28年） 映画「モンゴル野球青春記」DVD発売

⑪ 89番 野球寺(やきゅうじ)の建設

市や地元の有志でつくる野球のまち阿南推進協議会が、道の駅「公方なかがわ」に「89（やきゅう）寺」と名付けたほこらを建設する計画を進めています。2015年5月に市内で講演したスポーツジャーナリスト二宮清純さんが「四国霊場第89番札所『89寺』をつくって野球のまちをアピールしては」との提言を受けて構想を練ってきました。2015年3月に阿南市で合宿をした敦賀気比高校（福井県）が選抜高校野球大会で優勝したことから、「阿南に来れば勝負運がつく」とアピールします。「野球のまち」のシンボルとしても位置付け、市内で開く大会への参加者増や合宿の誘致につなげることをとしています。



野球のまち推進課は、ミュージアムのように野球グッズが所せましと展示されている。

6 特徴（独自性・新規性・工夫した点）

- ① プロ野球でなく草野球に着目したところ。プロ野球の誘致は、四国の自治体でも行われていますが、草野球チームの誘致に力を入れている自治体はありません。プロ野球を誘致する場合、受け入れ態勢もプロの仕様にしなければならず、維持・運営経費がかかる上に、滞在期間が短いことから相当の収益が見込めません。一方、草野球はプロ野球ほど敷居は高くなく、一年を通じて誘致が可能であることなどから、大きな経済効果が期待できます。野球が盛んであるという本市の特徴を最大限に生かした観光・産業振興事業です。
- ② 本格的な野球場（JAアグリあなんスタジアム）の完成に向け、「野球のまち阿南推進事業」を円滑に推進できるよう「野球関係者連絡協議会」を組織し、野球関係団体で意見調整を行うなど、事前に野球場の利用調整を行いました。
- ③ 市内の政財界・教育関係者・野球関係団体など約160団体に加盟する「野球のまち阿南推進協議会」を設立し、官民が一体となって事業を推進しています。
- ④ 国では、平成23年6月にスポーツ推進基本方針が策定され、日本の豊かなスポーツ資源を最大限活用した観光・スポーツ振興が推進され始めましたが、平成19年に「野球のまち阿南構想」を打ち立て、スポーツを観光事業として捉える本市の取組は先駆的なものであったと自負しています。
- ⑤ 「野球のまち阿南」を全国展開するためには、マスコミで取り上げてもらうのが一番効果的であると考え、機会を捉えてマスコミに売り込んできました。その結果、NHK番組の全国放送をはじめ、新聞、ラジオ、雑誌などさまざまなメディアで取り上げていただいております。
- ⑥ 旅行先で野球の試合ができる「野球観光ツアー」が人気を得ています。本格的な野球場の電光掲示板に名前が表示され、まるでプロ野球選手になったような気分で野球を堪能できます。もちろん審判、放送付きで、対戦相手や宿舎、観光地巡りは市が手配。夜は歓迎交流会を催し、郷土料理や阿波踊りを堪能していただけます。参加料金は1人13,000円と格安で、リピーターが後を絶ちません。

- ⑦ 温暖な気候と甲子園球場から2時間半という地域性を生かし、北信越地区から選抜高校野球大会に出場する高校野球チームの合宿を誘致し、夢の舞台での活躍をサポート。合宿では地元の高校野球チームと練習試合も組まれ、競技力向上にも一役買っています。
- ・2011年（平成23年） 佐渡高等学校（新潟県）
 - ・2012年（平成24年） 地球環境高等学校（長野県）
 - ・2014年（平成26年） 日本文理高等学校（新潟県）
 - ・2015年（平成27年） 敦賀気比高等学校（福井県）
松商学園高等学校（長野県）
 - ・2016年（平成28年） 敦賀気比高等学校（福井県）
- ⑧ 市と野球連盟が役割分担することにより、既成概念に捉われないスムーズな大会運営を心がけています。
- ⑨ 大会、合宿を誘致するうえで、市民ボランティアが大きな原動力になっています。地元の婦人会や体協による湯茶接待や炊き出し、野球道具の運搬が行われているほか、最近では、スタンドから試合を盛り上げようと、60歳以上のおばちゃんたちによるチアリーディングチーム「ABO60」が結成され、野球のまち私設応援団として大会に花を添えていただいております。官民が連携した「野球のまち阿南」の取組は、「市民が支える野球のまち」としてテレビや新聞等で取り上げられるようになり、参画をいただいている市民の皆さんの励みにもつながっています。



紅白のユニフォームと笑顔がまぶしい「ABO60」の皆さん

7 取組の効果・費用

効果

平成 27 年度の経済効果は約 1 億円

延宿泊数 3,252 人（大会 2,361 人、ツアー145 人、合宿 646 人、イベント 100 人）

延日帰客 6,721 人（大会 1,380 人、四国リーグ 2,692 人、ツアー149 人、イベント 2,500 人）

交流人口

平成 20 年度～27 年度 延べ 33,399 人（うち大会 24,126 人、観光ツアー2,736 人、合宿 6,537 人）

費用

平成 27 年度収支決算

収入額 1,810,002 円（協力企業 324,882 円、イベント入場料 516,600 円、大会参加料 260,000 円
定住自立圏共生ビジョン事業に基づく那賀町、美波町からの収入 600,000 円）

支出額 36,124,297 円（人件費 21,240,742 円 事業費 14,883,555 円）

8 取組を進めていく中での課題・問題点（苦労した点）

- ① 事業を立ち上げた頃は、市民の関心が薄いどころか、反対する人も多く苦心しました。しかし、できることを一つ一つクリアしくことで、周りの理解が深まり、賛同者が徐々に増えていきました。積極的な事業の推進が今日の成功につながっていると考えています。
- ② 課題は、審判員、放送員、記録員の確保です。専門性が高い上に高齢化が進み、慢性的に人員が不足しています。市では、定期的に審判員養成講座等を開催して、野球のまち阿南の一員として関わってもらえるよう、地道に呼びかけを行っています。

9 今後の予定・構想

- ① 「野球のまち阿南」の取組をテレビや新聞等で取り上げていただき、先駆的な取組が全国区になりつつあると強く感じています。今後は、野球愛好家による全国ネットワークを構築し、「野球をするなら阿南へ行こう」のキャッチフレーズを全国に轟かせ、名実ともに草野球の聖地として認められるようユニークな事業を展開していきたい。
- ② 更には、「一生涯、野球を楽しめるまち阿南」、「生活の中に野球があるまち阿南」を売りに移住促進につなげていきたい。
- ③ 「89番野球寺」を早期に完成させ、野球関連グッズやお土産品の開発・販売を促進し、更なる集客を図っていく。
- ④ あななんアリーナ（屋内多目的施設）を活用して、県外の少年野球選手を対象にした宿泊型野球教室を開催したい。

10 他団体へのアドバイス

- ① これまで、多くの自治体が「野球の試合や合宿＝プロ野球」として誘致合戦を繰り広げてきましたが、スポーツツーリズムという観点から、その自治体の特長を生かして事業展開することが市民参画も得やすく、官民が一体となって継続的に事業を推進していけないのでしょうか。
- ② 市民協力のもと、民間主導で事業運営を進めていくためには、市民の意見を積極的に取り入れ、行政の関わりをなるべく控えるようにすること。その上で、民間では運営しにくいことなどを行政がサポートすることで、結果的に市民の自主性につながったり、事業の発展に結び付いたりするものだと考えています。

11 取組について記載したホームページ

阿南市ホームページと別に「野球のまち阿南」の公式ホームページも公開しています。

ホームページアドレス <http://baseballcity.anan.tokushima.jp/top.htm>



野球のまち阿南 イメージキャラクター「あなんくん」



野球のまち阿南 ロゴマーク「あなん一球くん」

福島県在住の絵本作家菊池 清さん（70歳）がデザイン。

今年5月下旬に全国放送されたNHK番組を見て「野球のまち阿南」の取組を応援したいと、得意とするひらがなを使ったデザインを考案。